

きつねの心理學

川口 孫次郎

材木屋の木常の主人が狐に誑されたといふ噂があつたので、動物心理學上研究してやるとしてみたが、それはドウかの機會にヒドク儲かつたのでツイつまらないところに自から迷ひ込んで到頭人間の狐に誑されて身代限りをしてしまつたといふ丈であつて、別に珍らしい事は見付からなかつた野に棲む眞物の狐の誑すことも大抵よく似て居るので、野狐は人を誑すといつてもよし又誑しはしないといつてもよい、誑すとすれば人が誑るまでの事である。

人は若し氣常であつたならば狐は逆も人を誑すことが出来ないものである。狐に誑された人は、きつと誑される門口で、サア誑して呉れないかと云はぬばかりに自分で氣を不常にして待ちかまへて居つたからである。

野狐は大抵穴を掘つて其中に棲息するから、日の中に人目にかゝることは少くないが、霜月の末殊に師走狐といつてコン／＼鳴きながら人里近くを漁りにやつて来る、普通は「クワイー」／＼と怪聲を發する過目上野の動物園の技師とかいふ人の話に、内地の狐と樺太の狐とは其聲で分かる、樺太のはコン／＼と鳴くといつて居られたが、内地でも時季によつて前述の通りコン／＼と鳴く狐は油揚が好きであるから、従つて油揚包の鮪を「コン／＼」といつて労働者などが珍重かつて稻荷の社のコン／＼さんに供へることさへして居るとのことである。

兎に角、冬季になると、食料に乏しくなるから飢しさに堪へかねて、午後四時過ぎ頃から山際の里や畑に往々徘徊することがある、人を認めると直ぐに逃ぐるが、其逃げ方が狐流である、此方人数がないと見てとつた彼は逃げながら二三十間のところに止まつて首丈を此方に向けて横目に

一と睨むのである。其眼付は細いけれども長くても、
 兩端の真中にキラリと光る睛の工合には大抵の人
 々にイヤな感じを起させるのである。そこで此方
 からは必ず石なり土塊りを投げつけたくなるので
 ある。

投げつくと彼は此方の投石の無効距離に逃げ行
 いて、復たキラリと此方を睨む。かういふことに
 なるも此方も意氣づくになつて追かけて投げ付く
 る。彼は益此方の癢に障ることをする。此方は追
 ふ。こんな事を繰り返して居る中に最初追かけ
 た方が、そろ／＼と追つかげさせらるゝやうにな
 る。そろ／＼狐の主に此方が下部といふことにな
 つてくる。

但し鐵砲を持つて居ると彼は決して右のやうなこ
 とをえしない、此方が如何ほど巧に隠して持つて
 も彼はよく知つて居る。

されば、人が鐵砲をもつてゐない、そして其追う
 て來方がのろいと見てとつたら、彼狐はそろ／＼

其得意の藝當を此方のおかしけになつて居るとこ
 ろに試みる、斯くてノロい人間が一時中心の基本
 をぐらつかさるゝのである。

獵に慣れて頭のしつかりした男は狐が夕方に此方
 をなぐさみにかゝると右のやうにして馬鹿な振り
 をして何時までも狐に得せられた態で限隨して行
 く、狐も時分を見計つて、何時しか其催眠術をか
 けやうとして追々圖太くなつて、人の近くにウン
 と腰を下して暗示を施さうとする、此方は益馬
 鹿になつて居つて、決して堅くならない、「狐め」
 己を誑さうとして居る、曰れば決して誑らないぞ」
 などと内心で威張つたりなんかしない、唯虚心平
 氣で「夏は暑く、冬は寒し、黒團は概して黒く、
 猿の尻は概ね紅なり」といふやうな調子で居つ
 て、いと物静に袖口からツツと拳銃を巧に狐に向
 けて、ポカンと一發やるのである。百匹は九十九
 匹まで此方の所有になつてしまふ。

夜に入つては彼等の天地、一層アツかましいが

だつて高が小動物である、此方次第でドウにもなるかと可愛なものである。

日本全國共通の昔のいひ傳へに、狐は雨の夜に所謂狐火を點すとか、藁を被つて美人になつて現るゝとか、其衣裳の縞柄が明亮に闇にもわかるとか、摺違ふの時に嫣然と笑ふとか、先づ後ふりかへりみて居るとか、誠にツマラないをいつて居るが、一方から研究の材料にしては甚だ趣味がある。

何も修行の一と思つて、嘗て一冬、毎夜丑滿過ぐるころ、名に負ふ森や堤や寺や墓場で過ごしてみたが、實際はづかしいことではあるが、始めは墓場や廢寺などでは頭に冷水を浴せらるゝやうにジーツと泌み込むやうな感があった、併し靜に落付いてみると何でもない。何の不思議なものもない寧ろ一切の邪念を去つて純潔な想のみになつてしまふ。世に恐ろしいのは都市に徘徊する無謀の間である。孔子様でも揚虎を恐れられた、韓信で

も淮陰の惡黨どもを怏れた。あんな無茶な者にはコワイ、兎角用心が大事だが、それより外に恐るべき妖怪も變化もなく、萬一あつたと何ともない、少くとも右の實驗では通計三十幾日間に一度も變つたことがなかつた。

若し美人にあるなら、其當人は仕合せ、家族の仕合せ、延いて一國一社會の冀望するところであらう。味なことをするものかな、とも思つたが、よく調べてみれば、矢張狐にも美人は確にある。眼の細く吊つた吻の尖つた、大きな三角の耳の下まで切れ上つた口もとの美人である。狐のみでない、狸にも鼠にも皆美人はあるのである。

オツ／＼して縞が見ゆるのでないかと迎へて見ればはつきり見ゆるでもあらう、化物の正体見たり枯尾花といふこともあることだから。吾輩も随分注意してみたが、彼の服裝が茶褐色で、胸からお中の方へかけてホワイトシャツを着けて居ることは十分承知して居る。そして夜陰には唯全体が薄

黒いばかりで眞暗闇には所謂黑白も分たぬといふこと丈は明晰して居る丈である。

「ニヤリと笑ふであらう」と思つて、恐る／＼見るものだから、向ふの人は「此奴己を狐だと思つて居るわいと氣がついて可笑しくて堪らぬから笑ふのである。勿論狐も笑ふことがあるが、其笑ふのは決して人の笑ふやうな笑ひ方でない。イヤさうはいふものゝ、之丈は吾輩も未だ嘗て實地に見たことがない、獸類の中で笑ふ有様が人にわかるのは猿と馬とである。大學の先生も未だそこまで研究して居られないから一寸我輩の研究を參考に供したまでだが、全体笑にさま／＼あつて、いろ／＼の發表をするものであるが、兎に角之は高等動物否寧ろ人間が著しくもつて居るものであるつて、狐などは然る笑ふことは出来ないものである少くとも現在の進化の程度に於ける狐では逆も人の認むるやうな笑をする事が決して出来ない。ふりかへつて見るといふことは第一此方がふりか

へりみるからの事で、此方があるべきやうに平靜に歩いて居れば見ゆるはづがない。そこが出来て居れば、幾度ふりかへりみても先方はふりかへりみるやうなことがない。日中でも不謹慎な年若い女性などは他の盛装した同性と行違ふたら、百人は九十九人まで一寸後を顧みる。尤も此際吾輩は双方の遙／＼上にあつて天眼鏡を以て達觀して居つた、但し現在は研究が完了したら、そんなことはやらぬ……。「後／＼向く」といふことを狐にのみかぶせるのは少し狐に同情がな過ぎると思ふ。而も靜觀すれば之亦年若き女性としてのタシナミからツイそれとはなしに行はるゝことで、唯形式が上等でない丈のことである。他から強いて云々すべきものでもあるまい。追々にそんなことろにもタシナミが出来たらうと思ふ。男子にでも「美にして艶なり」などいつて、孔子様に筆誅せられて醜名を千古に流したもののさへあつたのだもの。こんな上品ならぬことは放置した儘でも自然

になくなつて行く。取てやかしくいふ必要はない
 イヤ話しが少し横に入りさうになつたが、兎に角
 狐は實際後を向くに相違ないが、決して人のいふ
 やうには笑はない。假令、後を見たねと笑つても
 誑された者のいふやうな笑ひ方をするものでない
 火を點することはない。猫の眼が暗の夜に光る
 が如くに、彼の眼が多少は光る丈の事。人はいふ
 彼の涎に燐があつて光るのだと、果して然らば口
 を火傷した野狐が其處らにゴロ／＼して居りさう
 だが、さうでないところを見ても、いゝ加減なこ
 とを附會して居るのである。

唯明瞭に斷言の出来るのは動物心理學上日中で
 も此方が頓馬であれば狡猾な狐は多少人を馬鹿に
 してかゝる。尤も馬や鹿は決して／＼狐には誑さ
 れぬ。人間のみが少し頭が多岐に働きかけて而し
 て弱いところがあると愚人扱にせらるゝわけであ
 る。特に夜になると人間の眼が晝のやうに利かな
 いから彼等の狡猾な奴が益増長すること丈は明

かであるといふ事である。かういふ場合に少し慌
 てた狼狽家には或は動物電氣で催眠術をウント一
 息でかけると、全く彼の尾の左右の振によつて與
 へらるゝサゼツシヨンのまゝに、昔の馬鹿者が動
 いたものか知れぬ。

併し之は狐のみでない。野犬は勿論他家の飼猫
 でさへ、闇の夜には他人を愚物視し、殊に日中虐
 待したものを純然たるマイナスに見下して、人の
 行く先、五六歩許でジーツと蹲つて居る。聲を出
 して追うとも又直ぐ三步四歩前に留つて動ない。
 甚だしきは二三歩極端なズルイ奴になると一寸唯
 一步丈横に、人の瓜先を避けて蹲る。之も別に彼
 等に何の利するところもないので、唯彼等が人を
 愚にしての悪戯である。此方が狼狽でもしやうも
 のなら拍手して笑ひでもするつもりであらう。併
 し畜生の智慧はドウしても畜生である。そんな
 場合は矢張、例によつて此方が一入かとなしく愚
 になつて、そして眼を半ば閉ぢて……人の眼を夜

でり彼等は一番恐ろしいと謂つて居るさうである……ウロ／＼と間抜けて途方もない方向を見ながら其犬なり猫なりの下顎に向つて、霹靂一聲力任せに下駄の角で見舞ふのである、吾輩は動物保護の主張者であるが、保護せらるべき資格のないものには無論其必要を認めない。罪ない子犬が飢えてゐる、之は憐むべきである。感心な馬が阪路で車に苦んで居る、之は憐むべきである。此等と今の野犬や野猫や野狐などの狡猾なもの、其待遇に等差があるのは當然なことである。

それから、狐を捕獲する法、殊に丸さきり狐を誑す方法がある。待て暫し束脩を行ふ以上に非ずば御話が出來ない。といふ程のことでもない。何れそのうち折を見て濼々と懇談を今度の次ぎに致すことにしませう。



女教員採否決議

學士會にては十月下旬例會を開き豫て宿題となり居れる「現代の日本に於て女子を如何なる程度まで小學校教員となすが適當なるべきか」の件に付全會一致を以て左の如く決議せり

- 一、女教員は主として尋常科第一、二學年を擔任せしむること
 - 二、女子小學校に於ては全教員の半數まで女教員を採用すると
 - 三、男女兒二種の學級を有する小學校に於ては女子の學級數三分の二までの女教員を採用すること
 - 四、單級小學校は必ず男教員を採用すること
 - 五、男子正教員を得がだき場合には以上の制限を越えて女子正教員を採用すること
 - 六、女子特有の技術に關する専科教員の採用は第一項乃至第四項の制限外とす
- 等にして學士會ば極力之が實行を期圖し居れば今後學界の爲め大に活動する所あるべしと云ふ